

# 黒崎町の合音

## 黒崎のスポーツ

(十三)

清水善夫さんは、昭和四十四年二月から黒崎村長となり、四十八年二月の町制施行により初代黒崎町長となった。

(先月号からの続き)

清水善夫さんが大野小学校の尋常科六年を卒業して新潟中学校に入学したのは、昭和十年春のことである。当時大野小には尋常科の上に高等科の二年制があったが、高等科は尋常科と違って義務制でないで、尋常科を了えると卒業して商店のどっちや、小僧さんになったり、家業につく者もいた。そして、残りの人が大野小学校の高等科に就学して卒業した。清水さんの記された通り、新潟の全日制の中等学校は新潟中学校と、新潟商業学校の二校しかなかったが、間もなく北越商業学校や市立中学校、新潟工業学校が開校する。

清水さんが新潟中学校に入学したところから、筆者が大野小の六年を卒業する昭和十五年までに前記の学校ができたようである。

そのころ、新潟の中等学校へ通う人は、よっぽど優秀の人が、お金持の家の子に限られていた。(一般に勉強など必要でないと考え

えられていた。)特に清水さんは、筆者の若いころの記憶によると学業はピカ一で、東京帝国大学在学中には、大郷の広野先生(前白根健生病院院長)と、二を争う秀才でお二人は恩師の銀時計組みという説があった。

前記、昭和十年の木口政雄さんたち新潟中学校と、新潟商業学校の卒業記念写真の左端に、新中一年生のまだ初々しい学生服姿の清水善夫さんが写っているが、その童顔の中に今の清水さんの面影が重なって見られる。この感想文は平成三年、大洋クラブで記念誌発刊の計画がなされたときに提出されたものである。

初代町長となった清水さん 人格識見高い清水さんは、多くの黒崎村民に属望されて昭和四十四年二月十三日黒崎村長となった。その任期中の昭和四十八年二月一日、町制が施行されて黒崎町長となり、同年二月十二日までの残任期間初代町長を務められた。

### 感想文(4) 大洋クラブ

宗村喜介

(大正十一年八月五日生)

大洋クラブについての記憶は、なにして六十一年も前のことですから、定かでない所もあります。一番に印象に残っていることを、一つ、二つ書くことにしました。

昭和九年の春、旧制中学に清水氏と共に入学しました。小学校の頃から野球が好きでありましたので、早速喜んで大洋クラブに入りました。商業学校の一年生も同じく一緒でした。入部した一日目に一年生を一列に並べられて、上級生が一人ひとりに凄いの球を投げられるので、グローブにキヤッチするので、その恐いこと一日でもう「俺はとてども駄目」だと思ひ、翌日からサボりました。所が次の日学校の帰りに電鉄の越後大野駅に降りたら数人の先輩に取り囲まれて「何故昨日の練習をサボッタ」と詰問され恐ろしくなり、「明日から必ず参加します」と言って、それから真面目に毎

週土、日曜日に大野小学校のグラウンドに練習に行きました。やることは、たまにキヤッチボール位で殆んど田んぼの中に入ったボール探しで、これも一年生の務めと思つてやりました。うまくなれば選手として試合に出して貰えるものだ、心に誓って自分なりに一生懸命に猛練習しましたので、三年生の終り頃に漸く試合に出されるようになってしまいました。

昭和十二年に海軍の航空隊に志願し、海軍の方が東京で二次、二次と続いてあったのでそのまま陸軍に入校しました。一年間は立川市にある飛行学校に基礎訓練を受けました。適正検査で機上無線の方に配属になり水戸の航空通信学校で少年飛行兵の十期から十六期までの指導訓練に当り、十九年頃から特攻隊を戦場に大勢送り出しました。皆、年令は十七才十九才の紅顔の美少年で、一命を投げ打って国のために敵艦に体当たりをやったのです。その別れのときに一人ひとりに握手をした手のぬくもりが今でも忘れられません。

訓練中のスポーツには、飛行場でよく野球をやりましたが、いつも投手をやり堪能してました。終戦のときは、

東京の市ヶ谷(現在の自衛隊本部)で迎えました。最後に飛行したのは終戦の年の五月八日、東京から南京まで新町偵(対地速度八〇〇キロ)で死を覚悟で重大なる任務を達成しました。

昭和二十年十月除隊になり故郷に帰り、早速青年団運動に参加して二十五年ころから西蒲原郡連合青年団の幹部となり、郡主催の野球大会を初めて黒崎村に誘致して盛会にやった事が印象に残っています。

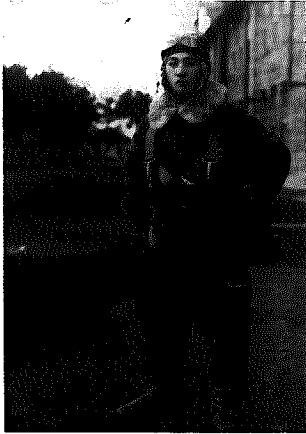
浅妻、大塚先輩を始め、清水氏以下後輩の諸氏と燕、内野、巻に遠征試合に行き帰って来ると新潟屋(故細田氏)の設営で安くしてもらって一杯やり楽しかったです。

優勝すると故北沢先生や、その後は故松井先生から金一封を戴いて大変お世話になり、このご恩は忘れることはできません。大野もんはきかん気で、且つ根性のある野球をやったと自負しています。

今でも大洋クラブのころを思い出しますと、わが青春時代そのものという気がします。心の中に拭き出れない辛い戦争体験も、又青春の真つただ中だったわけですが...

今は思い出を大切に一日々々充実した生活を送る様心がけ、これからの老後もエンジョイしてゆきたいと思っています。平成十二年四月三日、記

(続く)



飛行機に搭乗寸前の宗村喜介さん

